

# チゴガニ

# 水族館へ行こう!

## 京都大学白浜水族館

42

### 山本 泰司



チゴガニは、甲羅の幅がせいぜい1センチほどのスナガニ科の一種で、内湾や河口の泥干潟で巣穴を掘ってすんでいる。春から夏にかけて、晴れた日の干潮時には、チゴガニはそれぞれの巣穴の周辺で活発に行動している。干潟の縁にじっと



# 干潟の小さなダンサー

座り込み、双眼鏡で観察してみるのも面白い。食事中のカニは、はざまみ脚で泥を口に運び入れ、餌となる有機物をこし取って、残りの泥を吐き出し、団子状にして捨

てている。さらに注意して観察すると、隣り合うライバル同士が、威嚇やけんかなどのなわばり争いをしたり、相手の巣穴

最も目を引くのは、両方の白いはさまみ脚を一緒に振り上げては振り下ろす、まるで万歳のダンスをしているかのよう

な行動だ。近隣のカニ同士が影響し合って同調す

白浜水族館では、1982年からチゴガニを飼育展示している。初期のころは環境づくりがうまく

を泥でふさいだり、泥のバリエーションを築いたりする行動が見られるだろう。

この行動はウェイピングと呼ばれており、特に成熟した雄で繁殖期に頻繁に見られ、求愛となわばりとの関連した行動だと考えられている。

冬場、野外では不活発になり、ほとんど巣穴に潜っているが、水槽では泥の温度を15度以上に保っているため、巣穴から出ているカニが見られる。ウェイピングも1月から少しずつ見られるはじめ、4～8月にピークに達し、9月まで続く。

82年からチゴガニを飼育展示している。初期のころは環境づくりがうまくはさまみ脚を振り上げダンスを踊るチゴガニ(水槽番号401)

くびきず、長生きさせることができなかった。しかし、泥の高さや人工潮汐(ちようせき)など、改良を重ねた結果、毎年新しいカニを補充しながら、2～3年と推測されている寿命を全うできるようになった。

(京都大学技術職員)